

# マックス・ウェーバーの社会理論における 合理性の諸問題

斎藤 正 二

## (1) ウェーバーの社会行為、理念型および 理解社会学と合理性の問題

マルクスは、ドイッチェ・イデオロギーのなかで、人間の歴史の最初の前提は、「現実的な個人、行動、および所与のものとして見出され、彼等自身の行動によって作り出された人間の物質的生活諸条件」、すなわち、「人間自身が、彼等の生活資料を生産する」という人間の行動であることを指摘した。<sup>①</sup> この意味で、マルクスは「個人の生存」に基づく基本的行動理論を提示したものとみられる。

また、マックス・ウェーバーの社会学が、行為の概念を基本として社会の諸現象を究明しようとする方法、すなわち、行為的アプローチにあったことも周知の事実である。

人間の社会行為を基本として社会学の理論構成を行うという傾向は、近時多くの社会学者によって採られるところであって、とくにアメリカにおいて、ジンメルの心的相互作用理論にもとづき、心理学との影響から、社会的行為を理論化して行ったクーラー、G・H・ミード、トマスなど、さらにズナニエッキ（『文化科学論』）、ウェーバーからの影響を受けたパーソンズ（『社会的行為の構造』）、スメルサー（『集合行動の理論』）、G・C・ホーマンズ（『社会行動』）、およびミルズなど多くが数えられる。

われわれは、日常の社会生活のなかで、いろいろと考慮しながら、また、ある目的を実現しようとして、他人と話したり、手足を動かして労働している。このように、身体の状態を変化させて、活動するなかで、その行為者が主観的に懐いている意味が、他者あるいは多数者に向けられている場合を社会的行為というのである。

マックス・ウェーバーは、『経済と社会』(Wirtschaft und Gesellschaft) 第一部第一章「社会学の基礎概念」において、社会学とは、社会的行為の意味に結びつけて理解し、それによって社会的行為の経過と結果とを因果的に説明しようとする科学であると定義して、<sup>②</sup> 社会的行為を、社会の基礎的要素とし、これをもって、あらゆる社会現象、および形態を説明し、われわれの社会関係、社会生活の解明に欠くべからざる方法と概念を示したのである。

マックス・ウェーバーの社会的行為の概念は、われわれの行為の理解にとって重要な鍵を与えてくれる。そこで、行為者または諸行為者がそれに主観的な意味を結びつける限りでの人間の態度を行為といい、社会的行為とは、行為者または複数行為者によって思念された意味 (gemeinter sinn) にしたがって他人の態度に関係せしめられ、方向づけられている行為のことを指している。ここで意味とは、行為者または諸行為者によって主観的に思念された意味なのである。したがって、行為

は有意味的でなければならず、没意味的現象や対象、すなわち非人間的な自然現象、心理的ないし心理・生理学的現象、生物学的遺伝等は、人間行為の機縁、結末、促進、阻害として考察されるべきもので、行為の科学の範疇外である。

このように、ウェーバーの社会行為論は、パーソンズその他の社会学者によって受容されたし、また、わが国においても、行為的アプローチ=方法的個人主義として評価されるどころである。<sup>④</sup>

パーソンズは、ウェーバーの行為的アプローチ=方法論的個人主義をもって、彼の社会学を体系化しようとしたのであるが、しかし、新明正道が指摘しているように、パーソンズは、社会学理論そのものを構成するについて、やはり、機能主義の立場=即ち構造機能的分析をもって社会を分析しようとしたことは事実であって、ウェーバー社会行為論とは、全く区別せられねばならない点であろう (Talcott Parsons, *The Structure of Social Action*. 1949. PP. 500-694. 稲上他訳『社会的行為の構造』木鐸社、第四分冊一第五分冊)。

ウェーバーは、『社会学の基礎概念』の中で、個々の人間だけが有意味な行為の荷担者であるから、社会学的に行為を理解しうるものであると、方法論的個人主義の立場を闡明している。

「社会学による行為の理解の解明にとっては、かかる形象はただ個々の人間の特殊な行為の経過および連関であるにすぎない。何となれば、個々の人間だけが有意味的に方向づけられた行為の荷担者、われわれに理解される荷担者だからである。<sup>④</sup>」

ウェーバーによれば、人間の行為の意味を明らかにするには、個々人のいづく主観的意味を理解することであるといっている。

彼は、『理解社会学の若干のカテゴリー』において、「理解社会学(われわれの意味での)が単一の個人とその行為とを最小の単位として、その

『原子』として——こういうたとえ方はもともと慎重にすべきであるが、ここで許されるとして——扱う理由は、結局はその考察の目的が『理解すること』だ<sup>④</sup>』といい、またそれは、主観的に関係させられるし、つまり個人は意味のある行動の唯一の担い手なのである。

主観的意味とは、行為者のいづく他の人々への指向性ないし他者関係性をさしている。主観的を、主体的として捉えているのは高島善哉であって、ウェーバーが「主観的に思われた意味」は、社会の中で生き社会の中で行為している人間を、その生活原理なり、行為なりに即して内側から把握しようということであって、客観主義に対する主観主義ではなく、主体的といった方がよいのではないかとも言っている。<sup>④</sup> 主観的に意味を理解することは、意識的に(主体的に)相手を目指して行う、自己と他者との相互作用のことであり、主観的意味内容は、相互に依存的、補完的である。

ウェーバーの行為理論は、価値合理的行為と目的合理的行為との相互補完的關係として思考せられるものであり、また、ウェーバーは、行為についての理解を「主観的意味」の理解、あるいは「動機」理解として捉え、この動機理解を因果的説明と結びつけて、経験科学としての概念を行っていかうとする立場である。

また、宗教と経済との結合について、予定説を信ずる者の心理構造が合理的営利追求の心的態度と「親和性」(verwandschaft)をもつということが、宗教と経済を関連づけるモメントになっている。このことは、『資本主義の精神』に関する諸論文を理解する上に重要なことである。すなわち、宗教的同胞意識は、現世の秩序や価値とたえず衝突し、意識が首尾一貫していれば、それだけ衝突は苛烈なものとなる。現世の秩序や価値が固有な法則性にしがって合理化され昇華されていけばいくだけ分裂も和解しがたいものとなる。このことは経済の領域に現われてくる。すなわち、個々

の利益のために精霊、神々と呪術、秘法によって動かす原生的な方法は、長寿とか健康、名誉、子孫、来世の幸運と並んで富を獲得することを目的としたのである。このように宗教が救いの宗教にまで昇華され、経済も合理化されてくると両者の関係に緊張関係が生じてくる。合理的な経済は、事象的な性質をおびた経営であって市場での人間相互の利害闘争のなかから生まれてくる貨幣価格に目標を合せる。貨幣価格という評価が — 利害闘争なしには、どのような計算も不可能である。すなわち、近代の合理的資本主義における経済の秩序は、内在する固有の法則性に従って動けば動くほど宗教的な同胞倫理とは関係をもちえないようなものとなる。<sup>⑦</sup>

資本主義の経済秩序が合理的に、従って、「無<sup>ン</sup>人間的」になっていけばいくほどそうならざるを得ない。近代資本主義の展開が、結局、内的な組織として、近代官僚制という組織構造を生む必然的結果となる。

つぎに行為を理解する方法について、ウェーバーは歴史学派的「理解」 — 直観、追体験、感情移入などによる個人的な感受性に似たもの、ウェーバーはこのような非合理性に依存するのではなく、何よりも概念による加工を経て — 概念構成による方法 — 合理的方法によって理解する。

ここに、ウェーバーは、理解について「理念型」という概念構成を使用するのである。理念型は、主観的意味のうち最も合理的な行為を取り出して — 「目的合理的行為」、「価値合理的行為」 — を純粋化することによってなされる。つぎに非合理的なものを位置づける。すなわち、感情のおよび伝統的な行為である。

ウェーバーは、近代ヨーロッパの合理主義の性格を明らかにすることを通じて — つまり、目的合理性と価値合理性との間の緊張関係を手がかりとして解明することによって、価値合理的な行為が目的合理的連関の創造そのものに対して重要な

役割を果たしてきたということ、また、目的合理的見地からみると非合理的な要素が、近代ヨーロッパの合理主義のみならず、一般の文化の合理過程に対して重要な推進力になったという、つまり、合理性と非合理性との相互補完的關係を明らかにしていった。また、絶対的価値を信念とするピューリタンの行為は価値合理的であって、無限の利潤追求という目的合理的行為は、価値合理的行為の原動力となった。彼の『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』の著述は、これを中核としたものなのである。

つまり、目的合理的な行為からみれば、価値合理的行為も、カリスマ的行為も、ともに非日常的、革命的である。この非日常的、革命的要素が、ほかならぬ合理化の推進力となったので、個人の自発的でパトスの行為が、人間の内的変革を通じて魔術や伝統の束縛から解放し、合理化に対する道を切りひらいたとして、目的合理的行為と価値合理的行為との関連について、金子栄一はこのように指摘した。<sup>⑧</sup>

また、日高六郎は、M・ウェーバーの合理的概念を種々検討して、変革の視点を価値合理的なもののもつ意味を正しくすえた。<sup>⑨</sup>

ウェーバーは『理解社会学の若干のカテゴリー』（1913年）において、社会学の課題をつぎのように定式化している。

「『国家』、『仲間集団』、『封建性』といった概念は、社会学にとっては、人間の一定の社会行為の仕方をあらわすカテゴリーである。したがって社会学の課題はそれらを『理解しうる』行為へ、すなわち関与している個々の人間の行為へ例外なく還元するところにある<sup>⑩</sup>」。

このように、ウェーバー社会学は、行為的アプローチ、あるいは方法論的個人主義においてあるもので、行為者の内面に入り込みその「主観的意味」を解釈し、社会行為の概念構成をなし、これによって、社会関係、集団、社会構造、制度を解

明するのであって、それらはすべて、社会の諸個人の行為に基礎づけられ、またそれに還元し得られるものであるとしたのである。

#### 註

- ① マルクス・エンゲルス、三木清訳『ドイツ・イデオロギー』岩波文庫、46～47頁
- ② Max Weber ; *Wirtschaft und Gesellschaft*, in "Grundriss der Sozialökonomik" III, Abteilung, Tubingen 1922, S. 1.
- ③ 新明正道『社会学における行為理論』恒星社厚生閣、86～89頁参照
- ④ Max Weber ; *Wirtschaft und Gesellschaft*, (M・ウェーバー著、阿閉・内藤訳『社会学の基礎概念』角川文庫、23頁)
- ⑤ M・ウェーバー著、林道義訳『理解社会学のカテゴリー』岩波文庫、32～33頁
- ⑥ 高島善哉『マルクスとウェーバー』紀伊国屋書店 219～220頁
- ⑦ M・ウェーバー著、大塚・生松訳『宗教社会学論選』みすず書房、112～113頁
- ⑧ 金子栄一『マックス・ウェーバー研究』創文社 106～107頁
- ⑨ 日高六郎「マックス・ウェーバーの人間観」(鎌倉文庫版『マックス・ウェーバー研究』287頁)
- ⑩ M・ウェーバー著 林道義訳『理解社会学のカテゴリー』岩波文庫 33頁

## (2) 資本主義、官僚制と合理性の問題

マックス・ウェーバーがすでに述べたように、官僚制は、構造的にみれば規則の支配と権限の原則に基づく階統的なメカニズムである。すなわち、規則の支配とは、規則による職務への忠誠義務—職務遂行に必要な命令権の妥当根拠を表わしている。権限の原則とは、その権限の範囲内で職務が遂行される。職務遂行の非人格化・形式合理化は、

さらに次によって促進される。すなわち、(1)規則を合理的に適用し、また職務を遂行するために、高度な専門知識と専門技能とをもった、いわゆる「専門人」による職務の専門分業化が行われ、多数の小集団に分割されるとともに、個人には明確な責任と役割とが付与される。しかし、現実的には、明確な責任の保持は、派閥とセクショナリズムを生み、現実的には非合理性を醸成している。S・アイゼンシュタット(S.N.Eisenstadt)は、中国の場合についてのワン・ユー・チャンの言葉として「官僚は、そのそれぞれがすべて他のものよりも抜きんでようと争っている数多くの派閥からできているものである。そうした派閥というものは、地位と権力への個人的な野心のためにできるものであることもあり、また、ある特定の派閥によって代表される特定の社会階層の利害にもとづいてできることもある。官僚はむしろ、こうしたいろいろの派閥相互の力の均衡によってその存在をたもつか、あるいは、それらの派閥のうちの 하나가支配的な地位につくことによってその存在をたもっているのである<sup>①</sup>。」と述べ、官僚制構造の派閥的抗争について明らかにした。(2)文書による事務処理。しかし、文書による間接的な接触交渉は、人間関係を間接化し、事務処理の確実さと正確さ、職務行為を日常事務化し、職務上の秘密保持の傾向を助長する。(3)行政事務の私的領域からの分離は、さらに、職務の非人格化・合理化を促進する。つぎに、官僚制構造の中核をなすものは、職務階統の原則である。職務体系は、官庁・官職の上下関係の体系であり、命令・服従の階層的段階組織である。職務体系の頂点に立つ少数のひとびとによって政策が決定され、命令が下されるが、このコミュニケーションの過程は階統的従属関係を介して上から下への一方的な流れである。かくて各段階にある行政要員を職務上の規律と統制のもとに従属させ、専門分化した職務行為を統合しつつ、全体のエネルギーを目的の実現に向けて計画的か

つ迅速、強力に動員する手段としてそれは機能する。<sup>②</sup> このような職務による階統は、インパーソナルなものであるにもかかわらず、現実には、権限や地位のもたらす権威や威光の大小によって、この組織は身分階層的な秩序に変化している。また、能率化の原則に基づき、個人の地位と役割とが合理的に配分され、階統的に構成された「フォーマルな組織」に対して、現実的には、産業社会学者や多くの学者によって調査分析された結果が示しているように、「インフォーマルな組織」が構造的に可成り重要な発言権を持っているということ。例えば、グールドナー（A. W. Gouldner）は、米国の五大湖畔にある石膏工場施設における官僚制化過程を調査した結果によって、官僚制の定形化の進行は工場に限られており、その石膏鉱山では共通の危険にさらされるということのために、工場の労働者の場合よりも強固な<sup>インフォーマル</sup>非定形的紐帯と明確な<sup>フォーマル</sup>集团的連帯性ができあがっており、正確な職務をきめる定形的な規律や規則の代りに、非定形的な組織が作業を規制する際に定形的な管理制度の代りを務めたことを明らかにしている。<sup>③</sup> 官僚制の職務体系の構造は、その頂点に立つ少数の人々によって「政策決定」が行われ、命令が下される。かくて、ミヘルス（Robert Michels）のいわゆる「寡頭制の鉄則」（ehernes Gesetz der Oligarchie）の、「政策決定機能」をもつ少数のエリート層による権力的機構を構成する。

つぎに官僚組織に固有な行動様式は、官僚制のもつ行為規範である規律の遵守である。かかる規律の厳守があらゆる点において官僚の行動を規制し、その結果、本来の組織の目的は失われ、目的を達成する手段たる規律を守ることそれ自体が目的となり、ロバート・マートンのいわゆる「同調過剰性」<sup>④</sup> に導かれ、「形式主義」「画一主義」という非合理的なものを生み出し、いわゆる「繁文縟礼」（red tape）、官僚の独善の悪弊となり、官僚制からくる「人間の自己疎外」となる。この規

則の遵守としての形式主義は、職務の能率や反応速度を著しく阻害するに至る。

さらに官僚は、かれらによって発達せる「団体精神」が、かれら自体の階級的連帯の契機となるかわりに、新しい秩序や変動に対する防禦機制として働く。マンハイムは「官僚制の保守主義」について「たとえば革命の場合における大衆の勢力の勃発という形で折にふれて現われると、この勢力を単に破壊係数としてしか把握することができない。それであるから、官僚主義が、どんな革命の場合にも革命そのものの立場から政治的なものに対決しないで、命令の形で事態を収拾しようとする傾向を持っている。<sup>⑤</sup>」と述べている。マートンが行ったようにディスファンクション（逆機能）の研究から官僚制の特徴について再検討したブラウ（P. M. Blau）は、官僚制のマイナスの作用として、形式主義と儀礼主義をみとめ、変動に抵抗することから、かれらが当面する重要な新しい問題を処理する能力を持たぬことを明らかにした。<sup>⑥</sup>

しかしながら、官僚制は、必ずしもマイナスの面のみで説明されるべきものでなく、その「官僚制は複雑な社会機構における組織化の原理であることから、新政策を実行にうつし、社会組織を刷新し、変革せしめるための手段ともなりうる<sup>⑦</sup>」処の機能の半面をみのがすことはできない。ブラウも、官僚制が確立した慣習や秩序を厳格に守護する保守主義をもつ半面、また官僚制が変革の道具としての機能を演ずる面のあることをみとめている。<sup>⑧</sup> ことに、労働組合が資本主義に対抗する一大勢力を作り上げるためには、労働組合の複雑な官僚制的組織化と高度な効果性をそなえたりーダシップの原理が必要である。グールドナーは、前述の調査から、官僚制規則の六つの機能の中の三つはマイナスの機能であるが、次の三つの機能は、官僚制の合理的機能を持つことを述べている。<sup>⑨</sup> すなわち、(A)説明機能。これは、上部からの命令が迅速かつ正確に伝達されるためのコミュ

ニケーションの通路の役割をもつ。(B)間接的統制の機能。内集団の個人による統制ではなく、外部からの規則による統制は、公的な装いをもっているから、抵抗や紛糾を生ずることが少ない。(C)懲罰正当化機能である。以上で、近代官僚制の構造的な特質をあらゆる面からとらえたのであるが、官僚制が体制とどのような関連をもち、階層との関係や、将来の社会形成における官僚制の問題についてつぎに明らかにしなければならない。

註

- ① S. N. Eisenstadt, *Political Struggle in Bureaucracy Society*, World Politics, October 1956. 尾形典男訳「官僚制社会における政治抗争」『アメリカーナ』(1957. 5) 16頁
- ② 浜島朗「官僚制」(浜島・牧野編「現代社会学」23頁)
- ③ Alvin W. Gouldner, *Patterns of Industrial Bureaucracy*, Free Press, 1954. Chap. 6~8.
- ④ R. K. Merton, *Social Theory and Social Structure*, 1954. P. 155 ff.
- ⑤ マンハイム著、鈴木二郎訳「イデオロギーとユートピア」世界大思想全集24, 河出版 78頁
- ⑥ P. M. Blau, *Bureaucracy in Modern Society*, 1956, 阿利莫二訳『現代社会の官僚制』岩波26~27頁
- ⑦ 西村勝彦著「大衆社会論」誠信書房, 71頁
- ⑧ P. M. Blau, op. cit., 前掲書 102~111頁
- ⑨ Gouldner, op. cit., pp. 157~180.

近代的企業の規模の拡大化につれて、組織の能率を改善しようとする管理者の急務が要請せられ

る。(企業の官僚化は必然的に「新しい企業者」(ライト・ミルズ) — すなわち、「社長特別補佐」「一般経営顧問」「経営および技術顧問」というような職名をもち、(1)経済界における種々の官僚主義組織間およびそれと政府との関係の調整、(2)パブリック・リレーション、つまり近代経済の基礎を形成する一般大衆に対する新しい力の解説的な弁明、(3)過去四半世紀の間に新たに出現した事業、とくに無形のサービスの販売を内容とするもので、広告のごとき。などの役割を行う者<sup>①</sup>の出現。さらに、巨大で複雑な官僚主義的大企業組織においては、その資産階級内部における権力配分関係の変化並びに資産関係の官僚主義化の結果、事実上の権力の行使は経営組織に委任されるに至った。資産の「所有」と「管理」とが分離した — つまり資産の占める地位が変化した結果、常に資産を運用し、最大利潤をうることにのみ努力し、それを活動の目的としているいわゆる「経営者」の出現をみた。<sup>②</sup> 以上のことは、官僚化した巨大組織における管理能率を改善しようとする管理者の急務を物語るものといえよう。さらにミルズは、現代社会の主要な諸制度との関連においてエリートの観念を規定し、高度に集権化され官僚化された三主要制度あるいは機構の頂点に立つ「権力をそなえた選良」 — 会社金持 (The corporate rich), 政府高官 (political directorate), 軍首脳部 (warlord) — は、権力手段として、これら三制度の指揮命令権を持つポストを占有しており、現代アメリカ社会を支配する勢力となっていることを指摘した。<sup>③</sup> これらの領域の拡大、集権化にともない、いわゆる higher circles によって、それら相互間の「取引」<sup>トランザクション</sup>、経済構造と政治秩序の癒着、<sup>インターロッキング</sup>連結、人事交流と地位の相互交換が行われ、各エリート間の交流がますます増大する。かくして、巨大企業組織の官僚制化、行政・軍事機構の官僚制化によって、パワー・エリートを管理技術体系の中に取り込み、大衆を一方向的に操縦

できる構造を、現代社会は作り上げたのである。

その一方で、官僚制の規格化と慣例化は、多数の人間の服従を合理的に規格化してしまうため、人間は抽象的・匿名的 (anonymous) 存在となる。愛憎とか不安とかの人間の感情を禁止し、冷静と公平の原則を貫かねばならぬために、それは人間心理や人格に様々な歪みを与えてしまう。例えば、マートンが指摘したように、ヴェブレンの「訓練された無能力」(trained incapacity)、デューイの「職業的精神病」(occupational psychosis) と称された一種の変態的現象、手段としての規則の自己目的化、繁文縟礼、責任回避、過剰同調性、保守主義、権威主義、緊張と敵意、猜疑心等が、人間それ自身並びに人間関係の非人格化の例である。かくして、互換性 — 人間の機械視が生じ、フロムが「正気の社会」(Sane Society) の中で指摘したような人間性 — 自由・個人主義・自発性等 — の危機が生じているのである。ライト・ミルズは、市場原理に支配された雇傭労働者の社会では、パーソナリティ市場の形成は必然的であり、雇傭労働者の個人的性向や本質的な特色までもが商取引行為の対象となってしまうことを指摘している。つまり、人間のパーソナリティまでが、労働市場の単なる商品となってしまったのである。

次に、官僚制の二面性 (二重的性格) について述べることにする。<sup>④</sup> 官僚制は、現代社会の様々な体制並びにその構造的な特質により様々であるとはいえ、一応にいうことは、現代社会の組織の巨大化 (マンモス化) 複雑化から必然的に発生する管理的な構造特質を示すということである。その意味からすると、官僚制は、合理制と非合理制、同質性と異質性、人格性と非人格性等の相対立する性格をもつ。ブラウは、官僚制の中に、変動への抵抗と革新の容認という相矛盾する性格をみてとっていた。<sup>⑤</sup> また、アイゼンシュタット (S. N. Eisenstadt) は、官僚制を、対内的・内集团的構造からみるのではなく、一個の身分的グル

ープとでもいうべき組織を持った階層的集団としての官僚をみて、官僚制的な体制の基本的政治・社会問題、その他の社会層やグループの政治勢力関係、官僚層とその他の層との関係等の研究から、官僚の果す主要な仕事のうちでその本質的なものは、有力な各政治経済勢力の仲裁をはかるという機能・役割であると主張した。<sup>⑥</sup> 何れにしても、官僚制は、官僚制的体制の存在を合法化し、正当化せんとする傾向を持ってはいるが、ブラウがいうように、社会の変革の道具となりうることはありえない。マンハイムは、合理性と非合理性を「実質的」(substantial) 並びに「機能的」(functional) 合理性ないし非合理性と呼んでいる。<sup>⑦</sup> マンハイムの合理化概念によれば、官僚制が「合理化」されているということは、一聯の行動があらかじめ定められた目標に達するように組織され、かかる行動の各要素に機能的な位置や役割が与えられるという「機能的合理化」を意味している。しかしマンハイムは、現代のテクノロジーや行政組織は、実質的合理性と機能的合理性との分離を含んでいることを示したのである。すなわち、官僚制組織が一層合理化されればされる程、かかる人間的目的をもつ点から見れば、官僚制構造は、非合理的なものとなる。「社会組織というものを純粹技術的な合理性の規準にしたがって管理するということが社会的行動の非合理的な側面を無視する<sup>⑧</sup>」。これは、いわゆるブラウが云う「合理主義的管理の非合理性」ということを意味している。かかる点からも、いわゆるフロムの云う「生産手段からの疎外」、労働者の「道具化」、非人格化、機械視、商品化が生じている。マートンは、目的を達成する面とそうでない面、すなわち、正機能と逆機能という二つの面から官僚制をみななければならないとした。彼は、ビューロクラシーにとっては本質的な構造的要素を維持するための潜在的機能 (latent function)、すなわち「逆機能」を重視し、マックス・ウェーバー

の合理的で、顕在的機能のみを重視する立場とは正反対の立場をとった。官僚が、規律にしたがって絶対的な献身をなす様に訓練されると、行動とパーソナリティもそのように形成される。このことが逆に、規則主義、形式主義、儀礼主義、権威主義といった官僚制の弊害をもたらすのであり、官僚制は二面的な性格を持っているといえる。アイゼンシュタットが「官僚制社会における政治抗争」の中で明らかにしたように、官僚制は、体制あるいは他社会階層との関係にしたがって、それ自身の階層的同一性を作り出すのであり、他の階層との政治抗争を導き出すようなものとなることもまた注目されなければならない。いずれにしても、官僚制は、体制との関連性において、その性格が把握される必要がある。

官僚制の管理組織は、大衆社会を組織づける原理としても、また権力やリーダーシップの原理としても極めて重要なものである。すなわち、官僚制機構は、エリート（選良）とマス（大衆）を上下階層的に構成し、権力やリーダーシップによって支配のピラミッド構造を作り上げている。マンハイムは、「カール・マルクスやマックス・ウェーバーの記述したような社会の物質的機関の統制の集中化 — 生産手段の集中、そしてまた政治的・軍事的な手段の集中 — は、それが進むにつれて、一步一步民主化の動的原理をますます脅威するものとなっており、資本主義のもとでも共産主義のもとにあっても、小さな少数党の支配を促進している」「精神的並びに執行的機能が極端に官僚的となる傾向を生ずる。⑩」と述べている。官僚制機構が、政治・経済・社会のあらゆる領域においても進行し、権力が少数の人間の掌中に集中化することから、権力エリートとしての地位が固定化されることは前述したところであるが、ここに大衆社会の支配技術としてのリーダーシップの指導や操作のテクニックが用いられるとしたら、官僚制は、権力支配を一層促進せしめる手段となる。

「生産手段の所有がますます少数者の手中に集中されるのみでなく、種々なる活動範囲の間の大きな構造連関を認めうる地位も一層少くなると、かかる優越せる地位に昇ることができる人も少数になる。⑪」、かくて、選良と大衆との間の距離は大きくなり、大衆の自主的行動や判断力も失われ、アノミー化、情緒化、無関心化が進捗する。かくていわゆるミルズの「パワー・エリート」が出現し、権力化し、官僚制は支配の意図としての官僚制となる。かくて、官僚制のリーダーシップは、大規模成員を指導し、巨大な権力中枢にたいして影響力を行使する高度のリーダーシップの技術を行使するリーダー層を必要とする。

#### 註

- ① Wright Mills, White Collar, 杉政孝訳「ホワイトカラー」創元社 81頁
- ② 同上書 86~90頁  
※ライト・ミルズは、ここで、経営者と所有者とが分離し、いわゆる経営者革命が始まって、大資産家にとって代った強力な経営者層が次の支配階級として君臨するようになりつつあることを示したバーナム (James Burnham) の理論は誤解であるとし、それは、巨大で複雑な官僚主義化した企業における資産所有者と経営者との資産階級内部における権力の配分関係の変化にもとづくものであると主張する。(前掲書, 86~87頁)
- ③ Wright Mills, The Power Elite, 1956. pp. 8~11.
- ④ Wright Mills, White Collar, 前掲書 165頁
- ⑤ P. M. Blau, op. cit., 前掲書 95頁以下
- ⑥ S. N. Eisenstadt, op. cit., 前掲書 18~19頁
- ⑦ Karl Mannheim, Man and Society, 1940. pp. 52~53. 福武直訳『人間と社会』上巻 61~63頁

- ⑧ P. M. Blau, op. cit., 前掲書 61頁
- ⑨ Robert Merton, Bureaucratic Structure and Personality, in Social Theory and Social Structure, 1951. pp. 153~157.
- ⑩ Karl Mannheim, op. cit., 前掲書 53頁
- ⑪ Ibid., 同上書 70頁

## 結びにかえて

以上、要するにマックス・ウェーバーは、社会理論、とくに、近代社会の解明の鍵を、総じて合理性におき、合理性をもって、社会理論の中核を為した観を深くする。

既述のように、彼の社会学理論の中核を形成したといわれている社会行為論において、また行為の理念型において、そしてまた、理解の社会学理論において、目的合理性、価値合理性が、非合理的行為(感情的行為・伝統的行為)よりも、強く打出されている。しかし、パレート(Pareto)の社会行為の理論にあるように、「非論理的行為(非合理的行為)」を強調する社会学者もいる。広くいえば、人間性との観点からすれば、「人間愛」

というような、人と人との間柄、関係が強い絆となることを考えなければならない。近代資本主義の社会構造が、それを喪失させているのみで、今や人間性の復権が、現実の問題となりつつある。つまり、現在は、社会の変革期にあるといえる。

このことは、近代資本主義においても同様、資本の合理性、すなわち、損益計算、貸借対照表等における資本の利潤計算、さらには、パンチカード・システム等すべて資本の合理性に外ならない。近代社会の一大特徴をなす、近代官僚制の構造は、まさに、合理性の因果的適合的構造をなしている。このように、合理主義が近代・現代社会理論の中核を形成している。しかし、例えば、行為の非論理性を強調するパレートの社会理論や、その他、E・メーヨー、レスリスパーガー等によるいわゆる「ホーソン実験」によって理論的提示がなされたインフォーマルな人間の組織的構造が、生産性、人間関係におよぼす影響の大であることを立証した。このように、産業社会学にみられる人間性を主軸とする非論理的、非定形的社会理論に立つ<sup>インフォーマル</sup>人間の社会理論についても考察する必要のあることをここに強調しておく。